

百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時半
 於 東京家政専門学校2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時
 於 石原宅
 連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
 TEL/FAX 03-6273-2930
<http://www.hyakunincho-church.com>
 郵便振替口座：00180-8-565379



ろば



私の目線（七九）

苗字を考える

尾池 幸

私は若い頃から、結婚したら夫婦別姓という考えを持っていたので、結婚して入籍するとか、夫の苗字に改姓するという事は考えられませんでした。今から四十数年前の事です。この考えを理解してくれる男性とは巡り合う事はできませんでした。

最近では法律を改正して夫婦別姓を実施すると言われていますが、実際には婚姻時氏（苗字）指定制度とも言えるような内容となっています。

その当時私が考えていた事は

- ① 夫婦別姓
 - ② 複合姓
 - ③ 新しい苗字を創る
- のいずれかが可能にならないかという事でした。

私が結婚した時、様々な理由で、夫の氏を名乗る事になりました。私は夫と結婚するのであって、あなたの家の嫁ではないと言い、彼も十分理解してくれた筈ですが、彼の家族は長男の嫁として様々な事に口を出してきました。私は夫の親や兄妹を大切にすることは否かではありません。でもそれは自分の意志でそうするのであって嫁だから義務としてやるのではないのです。

離婚する事になった時は、私は迷わず自分の旧姓に戻る道を選びました。この為子供達

には学校生活や通称は私の苗字で、戸籍名や健康保険証などでは、父親の苗字という二重生活を強いる事になりました。この時程、結婚で苗字を替えずにすれば良いのと思った事はありません。

その後数年経って私は再婚する事になりました。苗字を替える事の不利は十二分承知し、また体験していましたから相手の男性に苗字を替えたくないと明言しました。しかし彼は苗字を替える事を条件に、私と子供達に抗し難い魅力のある提案をしてくれました。それは、子供達が帰って来たら「お帰りなさい」と言って迎えてやる事ができるお母さんを約束するという事でした。これ迄朝早くから夜遅く迄働いて淋しい思いをさせていたという私の気持ちの借りが返せるような気がして、私はまたここで意志に背いた選択をしてしまいました。しかも今度は子供達が夫と養子縁組をするというおまけつきで。

この為、子供達は前夫の苗字と呼ばれれば保育園の友人、私の苗字と呼ばれる時は小学校の友人、養父の苗字と呼ばれれば中学以降の友人と呼び名と友人の奇妙な相関関係ができてしまいました。再婚した夫とは精神的な病気と異常な金銭感覚によつて離婚しました。苗字や名前は個人をあらわすもので、記号とは違います。自分と相手を大切にすることを、結婚イコール改姓が当然であるという考えを見直さなければなりません。

勿論私は、親の姓を名乗っています。

文化も文明も超えた楽園―

旧約聖書の平和思想

創世記一章三―二章五節

創世記十一章―九節

金井美彦

はじめに

日本の政治は現在、官邸の独裁、不正や疑惑のオンパレード。これらの問題ばかりとりあげられ、七年前の福島第一原発事故以降の脱原発の活動、あるいは核兵器廃絶の問題が矮小化され、視野の外に置かれています。あるいは憲法改正の動き。これは政権のスキヤンダルでややトーンダウンしましたが、現首相の再選された今、予断を許さない状況にあります。その中であって、核兵器廃絶と平和への祈りの実現には、国家の暴走にノンを表明し、思いを結集して、政治状況を変え、多様な議論ができる姿に変える必要がある。これが一つの結論です。

ただ、このように直球的な呼びかけに簡単に応じてくれる人は多くはありません。世界全体が、野蛮化、退嬰化している今、多くの人々が無力感やニヒリズムに覆われています。それゆえ、社会の仕組みを変えようとする力は弱い。しかし、はるか昔からこうした困難と向かい合い、未来へと希望をつないだ思想が残されています。それが「旧約聖書」です。その根本的な姿勢について今日は学びたいと思います。そしてそこから平和の道を考えて

みたいと思います。

一、原初史の二つの構想

批判

耕す人とは隷属する人でもありません。ヘブライ語のアーバドの第一義は「仕える、奴隷となる」ということです。「耕し」を文化の起源と見たとき、そこには実はおそらく権力的なもの支配が前提され、それへの隷属が象徴されています。大地を耕すというのは実は大地に隷属するのではなく、大地を支配する「だれか」に隷属するということです。ですから文化の象徴としての「耕すこと」は旧約聖書では否定的に提示されています（つまりアダムとエヴァへの罰として）。現代において農業、特に日本の近代以前の農業は、一面理想化されますが、結局全体としては周辺化されています。その理由は、農民が隷属的で過酷な歴史を生きてきたからと言ってよいでしょう。だから、皆農家を継ぎたくないのです

大地に隷属し、かつ所有する人間に隷属する「耕す人」という在り方への疑い、そしてそれに甘んじて生きることへの批判があります。それゆえ、「農」を単純には賛美しないのです。それどころか、否定的にさえとらえるのです。

(二)「知識」の危うさ、あるいは文明批判
 そもそも、農耕自体が独立的に生じたので

はありません。なぜなら、農耕は種まきから収穫まで時間がかかりますから、その間、別な何かを食べなくてはなりません。当然狩猟や採集の成果に依存します。簡単に言えば、牧畜と農耕を比べたとき、牧畜の方が優位であるように見えます。なぜなら、生産と食の時間差がはるかに短いからです。農耕は農耕以外の何かに依存せざるを得ない。それは結局遊牧民、あるいはやがて定住した牧畜民、そして土地を占拠し、都市を作った人々であるでしょう。もちろん、本来は誰もが両方をこなしたのかもしれませんが。しかし、何らかの権力闘争が生じて、あるいは都市同士の争いの中で、一部は農耕に、一部は都市の支配者になった。つまり、耕す者＝隷属する者となったのです。したがって、牧歌的で、自然と共に生き、自ら耕して生きるという理想的な農民像は、おそらく虚像でしょう。極端に言えば、本来的に隷属的であるほかに、耕すことに必然性を感じない、つまりそのような階級や身分に生まれたからやっているというにすぎません。

余談ですが、日本の農業の衰えは深刻となっているといわれます。これもまた農民が農民として生きていくことにそれほど誇りが無いことを示しています。また非常に割を食う仕事であることを歴史的・体験的に知っているからです。だから都市へと向かう。農民は江戸時代、事実上農奴でありました。もちろん比較的恵まれた農民もおりましたが、有力

な農民は自立しているのではなく、支配階級と深くつながっており、結局は被支配民であり、自立も自由もなかったのです。農民がいなければ、支配階級の生活も成り立ちませんが、地位はもちろん逆転しているのです。

今日の箇所の先を読むと、動植物の前にアダムが作られ、「息」を吹き入れられ、生きた者となります。他方、エデンの園が作られ、命の木、善悪の知識の木がその中心に生えています。知識の木の実を食べる人間とは、「知識」によって文明化する人間を象徴するのはいうまでもありません。文明（都市化）と文化（耕し）はいずれも、人間自身を脅かすものとなります。ここでの「知識」（ダアト）は「知恵」（ホクマー）とは、重なる面もありますが、ホクマーは神の知恵、ダアトは人間に都合の良い情報というべきでしょう。

(三) ギルガメシュ叙事詩の主題について――付論として――

オリエント文明の自己批評としての『ギルガメシュ叙事詩』には、ギルガメシュの遍歴と文明化の過程が重ねられている。文明化（都市化）と共に、女性が抑圧され、森林（自然的世界の象徴としてのフンババ）が破壊されていく過程、他方、権力者の見果てぬ夢である永遠の命へ渴望に対する批判が極めて自覚的に描かれております。

(四) 文明批判としてのバベルの塔
なぜバベルの塔を建てた人々が非難されるのでしょうか。ユダヤ教のラビ、アブラハム・

スコルカによれば、この建設を命じた王が、それを建てている労働者が転落死しても、その労働者の命より、レンガ一つを大事にしたためであると言います。聖書の文明批判は結局、人間の分断、支配と隷属という文明（と文化）が必然的に招来する問題への批判であるといつてよいでしょう。他方、同時にそれを乗り越える道、神の知恵、法、を提示してゆくのです。

二、科学技術と国家の一体化による支配

昨年、核兵器禁止条約が国連で採択されました。しかし核保有国だけでなく、被爆国日本も反対したのでした。対外危機、特に北朝鮮や中国の脅威を理由に反対したのです。要するに抑止力としての核兵器を容認するという姿勢です。「軍事と賭博と原発の輸出」で生き延びるつもり日本、これは深刻な危機であるというほかはありません。

ところで、科学技術と国家の一体化、あるいは癒着構造は近代化の初めからのことです。ただしそれが文字通りそうなるのは第一次大戦後から第二次大戦直前、一九三八年国家総動員法以降です。いわゆる「一九四〇年体制」と呼ばれる仕組みは今に至るまで健在です。その象徴が原発であり、その体制の破綻が、福島事故（あるいはそれに先立つJCOの臨界事故、「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故）なのです。要するに原発は核兵器開発と表裏をなすのであって、それゆえ、脱原発は

安全保障上問題があるという考えが根強いのです。しかしこれはかえって危険であるのは明らかです。自民党の石破茂衆議院議員はあからさまにその立場に立っています。原発が原発と一体なら、かえって危険視されることになるのは自明で、かえって安全保障を損なう可能性が高いと言わざるを得ません。

三、文明と文化を超えて

今回の話はタイトルがやや異様です。しかし、旧約の思想は人間の文化と文明両方を相対化し、それを超えていく平和思想、すなわち創造者の前に自然も人間もすべて平和的に共存する終末における人間と世界の完成をはるか昔から構想していたのです（例えばイザヤ書一章）。

このような観念的な思想が力を持つでしょうか。私は持つと思うのです。というより、私は「文化」や「文明」を根本的に批判しうる、それらの支配する世界とは別な世界、すなわち聖書の終末論的世界像がなければ、そもそも批判も何もできないのです。それがいかに空想的であれ、理想化されていても、それを持つていれば批判は可能であるし、乗り越えていくことができます。私たちは新しいエデンを、聖書を通してすでに知っているのです。それゆえに、わたしたちは自信をもって、より良き世界のために活動できるのです。

（砧教会牧師）

百人町教会五〇年に寄せて
靖国問題と私

菅谷 博

小学生の頃の私にとって靖国神社は、上級生や同級生が戦争遺児として靖国神社に参拝してきたとか、招待されたとかの話聞いていた所でした。私の伯父も兵士としてニューギニアで戦死しており、従兄から参拝してきた話などを聞いていたのでどの様な所なのだろうと思っていました。

学業を終え一九六九年、都内の企業で働き始めました。そのころ写真を趣味にしています。休日は撮影のため浅草や多摩川、そして靖国神社にも行きました。初めて見た靖国神社は子供のころに描いていた神社より小さいと感じました。参道に銅像らしき物があり、戦闘場面の透かし彫りがある灯籠、門の扉に大きな菊の紋章が付いているのが印象的でした。「国家護持」のスローガンが道路から見えるところに、掲示されていました。一体「国家護持」とはどのような意味なのだろう、国で守ってほしいというのだから、誰かがこの神社を破壊しようとしている恐れでもあるのだろうか？国で厳重に警護して欲しいということなのだろうか？等と思った記憶があります。今思えば一九六九年は初めて靖国神社国営化法案が上程された年でした。教会は美竹教会に行ったり会社の近くにありました。美竹教会の聖書研究会に出席するようになり

ました。聖書研究会は私にはとても新鮮でした。聖書の話の他に、政治、経済、生活態度、生き方などが議論されていたからです。

聖書研究会などの仲間が主になって新しい教会が発することになりました。これが大久保祈禱礼拝、今の百人町教会です。私も誘われて出席しました。

平和についても盛んに語られました。平和を望むなら平和を希求する努力を日々重ねなければ得られない。平和は侵され易く脆いとも学びました。雨粒が集まり小さな流れが少しずつ大きな流れとなって行くように、戦争への道も初めは気にも留めない小さな動きですが、見逃すと大きな流れとなって止めようがなくなり、戦争は長い時間をかけて準備されるもので、突然に起こるものではないのだとも学びました。国民の戦争への高揚、武器産業、教育などあらゆる局面で戦争への道は忍び寄って来るのです。平和を犯そうとする動きは目を見開いていないと見えなくなり、立ち向かう訓練を常にしていないと行動が起こせなくなるのです。平和は与えられるものではなく努力して初めて得られると学びました。

津地鎮祭違憲訴訟、中谷裁判、忠魂碑裁判、など政教分離に関する裁判への支援などの活動がありました。津地鎮祭訴訟では名古屋高裁でよい判決が出ました。数日後に大久保集会所の修養会があり、電車の中で皆で喜びあったことが思い出されます、しかし私はその時、

裁判の内容を深く理解していなかったのが恥ずかしかったことを思い出します。その後、全国のすべての市町村に宛て、「高裁判決を守るように」との手紙を送る作業を、教会でしました。膨大な量でした。

八・一五デモに、私が参加し始めたころは千人規模の時もありました。大久保集会からも大勢参加しました。参加者は体の前後にゼッケンをつけて歩きました。ゼッケンをつけて電車に乗ったり歩行者天国を歩いたり、日常的にバッチやネームのような小さなプレートを付けたりしていました。注意されたらファッションだと言おうなどと話した記憶があります。

毎月第三日曜日の靖国神社国営化阻止のデモも五〇年前は百人規模でした。下谷教会からは、九段の靖国神社に向かうデモと、山谷方面に向かう女性と子供のデモとの、日程の異なる二つのコースがありました。参加者が減るにつれ二つのデモが合同して靖国へのデモのみとなり、今では参加者数も十人程度となり、毎月が隔月になりました。

五〇年近くデモを続けてきて、平和を脅かすものもろの動きを、つぶさに見る窓となり、アンテナの役をして来たのではないかの思いがあります。

現在の国会議員の三百名ほどが神道政治連盟の会員であり、閣僚二十名中、十八名が会員なのですから。

稀有な日本のキリスト教の負の遺産と
その血を受け継ぐ日本人クリスチャンの
生き方について

河部 薫

百人町教会並びに縁ある皆さん、あなたは今の自分自身を部下として握手をし、褒め称える毎日を送っていますか？今の生活に疑問を持たず生きていませんか？

一五四九年にイエズス会のフランシスコザビエルが日本にキリスト教を、西方教会の先兵としてポルトガル商人と共に布教活動を始めて四六九年が過ぎようとしています。血に染まったキリスト教の一神教としての排斥、征服、異教徒に対する人殺しの歴史は正当化できるものではありません。一人一人がいかに総括をし、現在にクリスチャンとして活かす生活を出来ないのであれば、自己満足そのものです。

阿蘇先生が私達に示した民衆の中に入り宗教を超えて、様々な社会問題を共に考え、解決策を自らの全身全霊をもって実践する姿が光あれといったキリスト教の矜持であると思います。私は、いつまでもこれでいいのかと自問自答する、迷える子羊であることを自覚する昨今です。

一年前、名大病院の医師からがん宣告を受けてから今年五月末に完快の沙汰を受けるまでの八ヶ月の間、人生を振り返る時を与えられ、自我に目覚めてからの六七年度の道のりに、

思いを巡らせることが出来て心から天に感謝します。

①勉強が出来なくても整理整頓 ②衣食住足りて最後に残ったお金が本当の財産 ③約束できない約束はしてはいけない ④酒を飲んでも几帳面に ⑤商人の本分（仕入れ先、お客様、自分自身、の満足）を忘れず命と引き換えの商道を究める事⑥世界の中の日本人の矜持をいつも忘れない事、の六つの家訓を幼稚園の頃から叩き込まれた父、祖母を思い、出来が悪かったなあと思いました。病院のベッドで見た三途の川の夢は何故見たのかなと考えると、小さい頃から正月の神社詣で、先祖の墓参り、法事等、又、幼稚園（寺経営）の時の行事での仏教に諸事に関わったのが身に染みていたんだなあと思いました。

私は後戻りできない毎日を送っています。歴史に if（もし）はあり得ませんが、もう一度人生のやり直しができたらしたら（同じ人生しか与えられないとしたら）あなたはその人生を歩みますか？不満足だった人生を他に原因を転嫁していませんか？すべての原因と結果は自分自身が作り出していることに気がつくべきだと思います。私は第三の人生を神様から与えられました。神様から与えられた能力を磨き、鍛え、七〇歳になっても感動、興味をなくすことの無い様に心掛けています。何故日本では伝来以来ここ日本に於いてカトリック、プロテスタント、正教他、合わせても一%にも満たないのでしょか？みなさ

ん僕に教示下さい。私の尊敬するクリスチャン、アイシユタイン博士が一九二二年に来日した折に羽田空港で世界に向けて発信した言葉が残っています。「世界の未来は進むだけ進み、その間幾度か争いは繰り返されて、最後の戦いに疲れる時が来る。その時人類は真の平和を求めて世界の盟主を挙げねばならない。その盟主たるものは武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を抜き超えた最も古く、最も尊い家柄でなくてはならない。世界の文化はアジアに始まりアジアに帰る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らなければならない。我々は神に感謝する。我々に日本という尊い国を作ってくれたことを。日の出ずる国、日の本、日本」昇る朝日に手を合わせ感謝する崇高で勤勉な国民性に心を打たれたと言われる。（アイシユタインの言行録引用）

私はプロのラテン、カンツォーネの古希の歌手としてアルベルトの名を使っています。アイシユタインを尊敬するものとして。又、いつの日か私の歌を披露する日の来たらんことを願っています。

時速一六七〇kmで進む地球号と共に皆、平等に棺桶に向かっていることを覚え（世の為、人の為、自分自身の為）無償の愛と奉仕の精神で、毎日与えられる命に感謝し、東の空を仰ぎつつ日々精進・研鑽していきます。どうかそれぞれの道を堂々たる自信と笑顔で共に歩みましよう。

ろばのせなか

「私の目線」の尾池さんは、夫婦別姓を求め続けながらも日本の土壌の中でそれがいかに困難な事であったかを、ご自身の体験を通して書いてくださった。前号では、家制度に立脚したお寺の僧侶として、選択的夫婦別姓制度に関心をもっておられる廣澤さんが書いてくださった。共に深い問いかけを感じる。土岐先生の「平和ではなく剣を・・・」のことばの背景、紀元前からの歴史の中で解いてくださった。

十月の砧教会との講壇交換の日がご尊父のご葬儀になり、金井先生はお悲しみの中から文書の形で証詞を届けてくださった。「パウロが、繋がりにある各地の教会に手紙を送ったことが、今日とてもリアルに感じられる」と礼拝後の応答で長谷川さんが発言。私たちも思いを同じくした。

菅谷さんの「靖国問題と私」。平和を脅かすもろもろの動きへのアンテナを働かせながら、闘い続けてきた五〇年。百人町教会の大事な柱が語られている。

大きな病の宣告を受けた後、一年の治療に専念して回復された河部さん。「それぞれの道を堂々と歩もう」と、名古屋から呼びかけてくださった。

紙面の構成上、「図書紹介」は次号に。

主を待ち望むアドベント。今日は三本目のろうそくに灯が点された。御子ご誕生はすぐ。

(泉谷 五十鈴)